



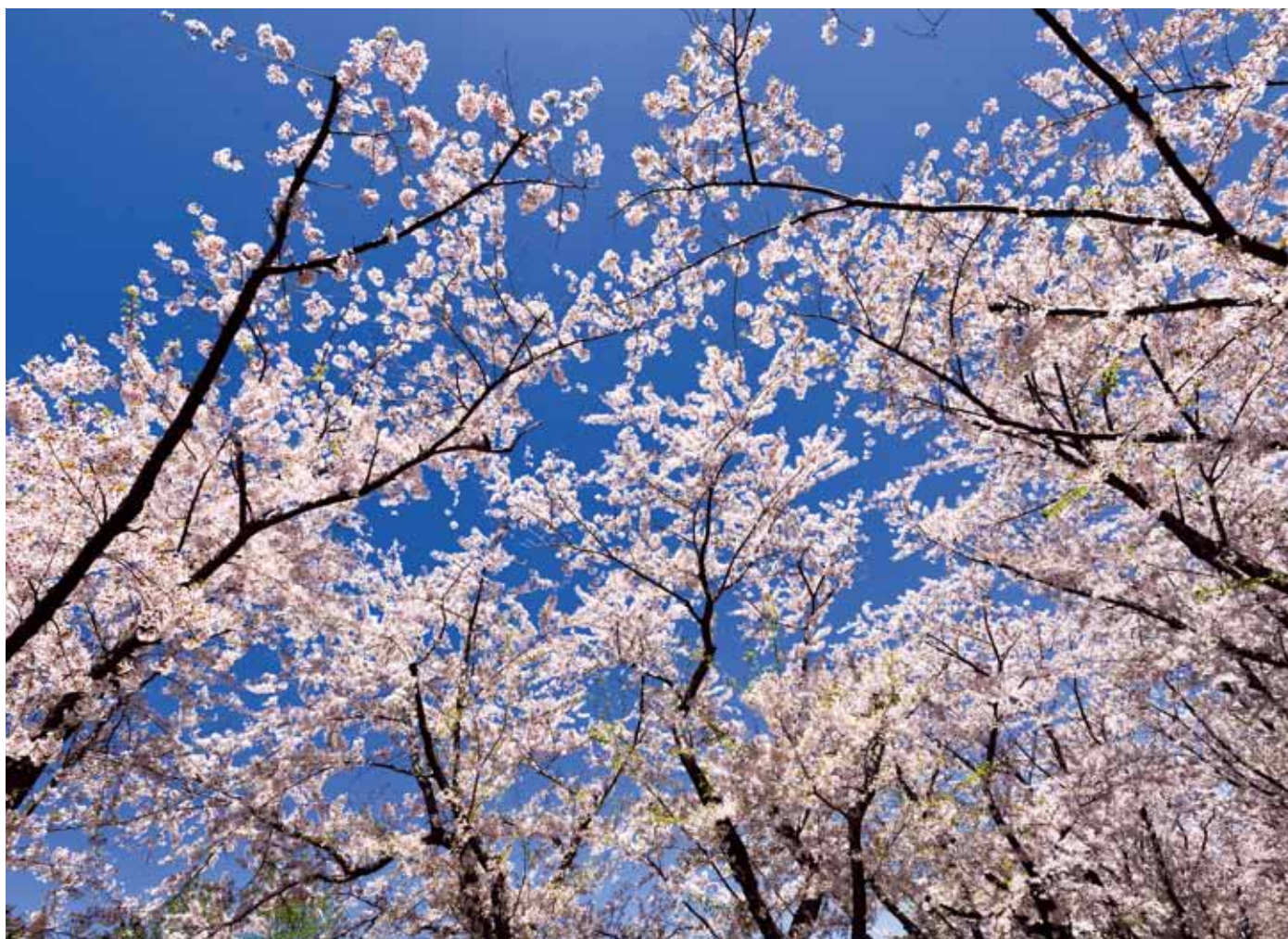
Hokkaido Lifelong Learning Association

ほっかいどう 生涯学習 Lifelong Learning

ホームページアドレス <http://www.hsgk.jp>

新しい自分との

出会いや発見がきっとある



目次

- 生涯学習協会「平成29年度事業計画」の概要…… 2
- 平成28年度情報交流広場展示計画（4月～9月）…… 5
- これからの生涯学習を展望して…… 4
- 随想37…… 6
- 私の生涯学習…… 5

生涯学習協会「平成29年度事業計画」の概要

次のとおり平成29年度の事業を計画いたしましたので、皆様のご支援・ご協力を賜りますようお願いいたします。

会計区分	事業名	内 容
公益目的 事業(公1)	1 生きがいづくり 生涯学習促進 事業	<p>国際化・高齢化・情報化等社会の変化に対応し、生涯にわたって生きがいのある人生を送るために、「生きることは学ぶこと」の視点から、道民への学習の機会を提供する。</p> <p>○テーマ:「人生を共に豊かに過ごすために」</p> <p>○期 間: 6月～1月</p> <p>○会 場: 全道7会場</p> <p>○対 象: 道民、1会場100人程度</p> <p>○内 容: 講演・実技・演習等を基本に、実施市町村等の計画する内容を支援する。</p>
	2 かでの講座事業	<p>道民の学習ニーズや今日の課題に焦点を絞った講座を開設し、道民への学習機会を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開催回数: 10回程度 ・開催時期: 4月～12月 ・会 場: かでの2・7 ・対 象: 道民、1講座200人程度 ・講座時間: 1講座2時間 <p>○連携開催を希望する市町村にICT機器を使用した遠隔学習を実施する。</p> <p>○講座終了後、講師と受講生の茶話会を広場交流コーナーで実施する。</p>
	3 ほっかいどう生 涯学習ネット ワークカレッジ (道民カレッジ) 事業の推進	<p>学習ニーズの多様化、高度化に対応するため、学ぶ意思のある道民のすべてを対象に、産学官が連携して総合的な学習機会を提供するとともに、自立した北海道の創造に寄与する人材を育成し、生涯学習のネットワーク化を図る。</p> <p>また、ジュニアコースの学びを通し、次代を担う子供たちの生きる力の育成を図る。</p> <p>○主催講座</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ほっかいどう学大学インターネット講座 インターネットによる動画配信と制作したDVDを高等学校等に配布し、広く道民に高度な学習機会を提供する。 <ul style="list-style-type: none"> ・参加大学: 6大学程度 ・配信及び配布開始: 11月～ ・企画運営: 参加大学を含む実行委員会 2 ほっかいどう学地方創生塾 地域の様々な機関や住民等との連携によってワークショップや講演等を実施し、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成する。 <ul style="list-style-type: none"> ・企画実施者: 市町村や地元団体 ・申込み方法: 公募(決定は道教委) ・事業規模: 全道2市町村(オホーツク管内: 美幌町、根室管内: 羅臼町) ・事業内容: 2年間、年間3回程度 ・そ の 他: 修了者リストの作成 <p>事業の取組みについて、ホームページに掲載し紹介。</p> 3 地域活動実践講座 道民カレッジ生がおこなっている地域活動のレポートを作成し交流をとおして、地域活動への参画を促進する。 <ul style="list-style-type: none"> ・事業内容: 年2回実施、地域活動のレポート作成と交流、講演等 ・そ の 他: 道民カレッジ生の地域活動をホームページに掲載し紹介。 <p>○連携講座 道民カレッジに賛同する大学等や市町村、民間教育事業者等が実施する講座・セミナーを体系化し、道民に講座情報を提供し学習機会の拡充を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・登録講座数: 5,500講座(目標) ・受講者数: 132,000人(目標) </p> <p>○普及啓発・情報提供 道民カレッジ事業の推進のため、次の普及啓発及び情報提供を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・道民カレッジガイドブックの作成及び配布 ・カレッジだよりの作成及び配布 ・道民カレッジポスター・リーフレットの作成及び配布 ・道民カレッジ手帳の作成及び交付 ・ホームページ及びツイッターによる適時な情報提供 </p>

会計区分	事業名	内 容
	4「道民カレッジ」大学インターネット講座支援事業	<p>「道民カレッジ」の主催講座である「大学インターネット講座」の補助教材を作成するとともに、レポート作成を支援する学習会を開催するなど、広く道民の学習活動を支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○作成部数：100部程度 ○発行時期：10月下旬 ○レポート学習会：動画配信及びDVD配布後 <ul style="list-style-type: none"> ・開催場所：かでの2・7
	5「道民カレッジ」ボランティア活動支援事業	<p>道民カレッジの充実と推進を図るため、道民カレッジボランティアによる自主的・自発的な活動を支援するとともに、圏域間の情報交流や称号取得者の技能・知識等の向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○人 数：約120人 ○活動場所：全道5圏域 ○主な活動 <ul style="list-style-type: none"> ・カレッジ事業への運営協力、支援活動 ・カレッジ生の学習相談活動 ・単位取得方法及び称号取得へのアドバイス活動 ・カレッジ生の加入促進活動 ・カレッジ生間の情報交流会の活動 ・新規講座の自主的な企画、実施活動 ○主な事業 <ul style="list-style-type: none"> ・圏域代表者会議の実施 ・称号取得者セミナーの実施
	6 学習成果実践事業	<p>道内各地で学習している道民が、その学んだ成果を活用して、自ら講座を企画・実施し、地域づくりを担う実践力を育成する。</p> <p>また、顕著な功績が認められる実践者等を表彰する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○開催時期：4月～ ○開催会場：道内5会場 ○対 象：道民 ○内 容：講演・実践発表等、かでの講座の遠隔学習、大学インターネット講座の学習
	7 広報誌発行事業	<p>会員及び生涯学習関係機関・団体等に広報誌を通して情報を提供し、生涯学習の振興に寄与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○回 数：年4回 ○部 数：1回1,200部
	8 生涯学習情報資料の展示・提供事業（情報交流広場管理事業）	<p>生涯学習に関する図書・資料・リーフレットなどを展示・提供するとともに、道内市町村や団体の生涯学習の取組や成果等を広く紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ、LD、大学インターネット講座DVDの視聴 ・道内市町村の広報誌及び情報リーフレットの展示 ・ガイドブック、ポスター及び連携講座関係資料の展示 ・道内市町村及び団体の学習活動に関する実践成果等の企画展示会の開催 ・道民カレッジ生の交流コーナーの活用促進 ・道民の利用に供するため、土曜日・祝日を除く平日、日曜日（9:00～18:00）に広場を開館
	9 視聴覚教材貸出事業	<p>生涯学習活動の振興を図るため、道教委保有の視聴覚教材を官公庁、学校、社会教育関係団体等に貸出しする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・16ミリフィルム（801本）、ビデオ（4,189本）、DVD（550本）等 計5,540本
収益事業等（その他事業）	10 北海道スポーツ推進委員協議会受託事業	<p>北海道スポーツ推進委員協議会の管理運営のために事務局を受託し、道民の生涯スポーツ活動に寄与し、生涯学習社会の実現を図る。</p>

これからの生涯学習を展望して

北翔大学

副学長 山谷 敬三郎

ユネスコの「21世紀教育国際委員会」は、1996年4月に「学習：秘められた宝」と題する報告書を公表している。この報告書の名称は、フランスに伝わるラ・フォンテーヌの寓話「農夫とその子供たち」からヒントを得ていると、当時のEC委員長であり、本委員会の委員長でもあったジャック・ドロール氏は述べている。この報告書では、21世紀の生涯学習における「学習の4本柱」を提言している。本稿では、その柱を現在の教育課題と関連させて、これからの生涯学習で身につけるべき資質や能力を述べることにする。

1. 「知ることを学ぶ」

学校教育は、ともするとマニュアル化され、体系化された知識・技術を獲得することに傾斜しているとの批判を受ける。近年では、その学校教育においても、知識獲得の手立てそのものを習得することに力点がおかれている。「知ることを学ぶ」とは、集中力、記憶力、思考力を動員して“いかにして学ぶかを学ぶ”ことである。高度情報社会においては、単なる情報処理の能力だけではなく、人間本来の能力である連想に基づく思考力や記憶力という能力が求められる。生涯学習においても、情報収集における受け身的な態度を超えて、能動的な情報収集の能力やそれらを活用する具体的思考や抽象的思考、演繹的思考と帰納的思考の両者を駆使する力を身に付けることが求められる。

2. 「為すことを学ぶ」

このことは、「知ることを学ぶ」と不可分である。つまり、学習者に勉学と行動を関係づけることが次第に重要な意味を持ち始めていることに対応することである。獲得された知識を適切・効果的に行動に結びつけること、予想もできない様々な状況に直面したとき、それまでに獲得した知識を駆使して対処することが求められる。協力することの大切さを実際に集団で行動する機会を通して学ぶことが、現代の子供たちのみならず大人にとっても必要である。

3. 「(他者と)共に生きることを学ぶ」

このことは、今日の教育の最重要課題の一つである。世界は今、偏見、差別、抑圧、排除、憎悪、敵愾心、反目、暴力、紛争、戦争、そして、破壊的危機状態にさえ直面しているといえる。一方、人権、平和、民主主義、寛容、異文化や価値の多様性を認識し、尊重することが、身近な日常生活の中で生起する問題解決の鍵であることも主張されている。教育がこのような状況を改善する唯一の方法であることは誰もが認めることである。生涯学習においても、「共に生きることを学ぶ」ことが根本において必要となる。

4. 「人間として生きることを学ぶ」

このことは、本報告書が1972年のエドガー・フォール報告書「人間として生きることを学ぶ」の精神を継承していることを示している。なぜなら、人は21世紀において、これまで以上に自立心と判断力をもって「世界市民」という共通の目的を達成するために、個人の責任感を一層強固にしなければならない。生涯学習は、人生の各期における家庭教育、学校教育、社会教育などの機会をも含めて、究極的には個人個人の才能を伸ばし、自己実現を図る人間にとっての基本的な営みである。「いかに生きるべきか」が問われなければならない。

本報告書の表題となった「学習：秘められた宝」の意味することは、老農夫が臨終の際に子どもたちに畑を耕すことが大地に秘められた豊かな作物を生み出すと諭した話から、学習がそれぞれの人の隠された才能を開花させることであるという比喩に基づいている。

私の生涯学習

函館市文学館

館長 福原 至

「生涯学習」が生涯にわたって行われる「具体的な学習活動」をさすものであると言われるようになったのは、昭和56年の中央教育審議会答申（「生涯教育」について）からであったと思います。

私にとって「生涯学習」という言葉は、30歳代前半に学校の教員から社会教育行政の道に進んだ時から、「人々の生涯学習を推進すること」という意味合いと「自分自身の生涯学習を深めること」ととらえる言葉となっています。

社会教育主事としての第一歩は昆布漁主体の漁師町でした。漁業振興に係る専門的学習をはじめ浜の生涯学習が盛んで、絵画、陶芸、七宝焼き等町民の学習ニーズに応える公民館講座や高齢者向け講座（手踊り、民謡、カラオケ教室）などを担当しました。講師の助手をするうちに、「門前の小僧何とやら」で、多くのことを学び取ることができました。

次には、道東の大きな海水湖を抱える青少年宿泊研修施設において、カヌー、カーリング、サイクリング、登山、オリエンテーリング、飯盒炊きさんなどの野外活動や焼き板工作、陶芸、バター作りなどの指導・支援にあたり、またも学びを深める機会となりました。

その後、平成15年、道立生涯学習推進センターで岩手大学からのネット配信講座「啄木と賢治の魅力」があり、「函館で育ち、盛岡で大学生でしたから啄木や賢治に詳しいのではないか。」との声上がり、講座内容の概説担当となりました。偶さか函館・盛岡だっただけのことでしたから、大学作成の資料、参考図書、インターネットを駆使して学びを深め、補助資料も作成・活用して、何とか役割を果たせたことを懐かしく思い返しています。

函館市文学館は、元銀行であった歴史的建造物を活用して平成5年、石川啄木生誕100年記念と銘打って開館し、2階フロア全面には石川啄木に関する自筆の手紙や原稿などを展示し、1階フロアには函館ゆかりの作家たち、佐藤泰志、辻仁成、宇江佐真理、森本禎子、亀井勝一郎、久生十蘭などの作品や直筆原稿、身の回りの品々を展示しています。

因みに、平成29年度は、石川啄木来函110年の節目の年に当たり、石川啄木曾孫を迎えて、来館110年に寄せて、講演会や企画展などを開催することとしております。

当館をご利用される小・中・高校・大学生をはじめ市民、観光客の皆様にも、説明することもありますので、石川啄木を筆頭にそれぞれの作家の人となりやその作品などについて学びを深めることも、現在進行形の生涯学習となっています。

私自身が生涯学習のテーマとしているところの「如何に生きるべきか」の追究に向けて、『現代人のスタミナ読書古典の読み方』（谷沢永一著PHP文庫）をはじめ、古今東西の名著等を学習の手立てとして、真摯に学び続けていきたいものと思っています。

■■■平成29年度情報交流広場（まなびの広場）展示計画（4月～9月）■■■

月	実施期間(予定)	実施団体名
4	4/3(月)～4/28(金)	国立大雪青少年交流の家
5	5/1(月)～5/31(水)	いしかり市民カレッジ
6	6/1(木)～6/30(金)	北海道立青少年体験活動支援施設
7	7/3(月)～7/31(月)	文化財保護協会
8	8/1(火)～8/31(木)	北海道図書館振興協議会
9	9/1(金)～9/29(金)	北海道共同募金会

随想37

ものの変化と宗教心

2011年のアンケート調査で、神を信じるフランス人は56%であったという記事を読んだ。ほとんどカトリック教徒とのこと。かつての1947年調査では66%であったが、宗教力の弱まり化が進み、現在は65歳以上の人は66%で、18~24歳の若者層では47%であるという。

こんな記事から思い出されたことがある。それは、わが実家には神棚が無く、仏壇だけであったことである。お正月に神社参拝の習慣もなく、父の口癖のひとつは、新車に神社からいただいたお守りをぶら下げようような行為は意味がないといった言葉であった。それで、事故が防げるのならばお守りを下げるのを法律化すべきだというのである。極論ではあるが、私自身も神頼みする気はなく何もしないで生きてきた。仏壇には時折手を合わせ、お盆などの墓参りの習慣は今も続いているが、多くの日本人は仏教徒であるにもかかわらず、このような神頼み行為を行いつつ、仏壇とともに家にある神棚にも手を合わせているのが実情のようである。“神国日本”の古い伝統を残しているのだろうか。

先の宗教心という精神的変化は、別の近年の物理的変化つまりモバイル=携帯電話の普及化と関

連するとも考えられる。その考えのヒントになるのが、コミュニケーション論の橋元良明氏らの調査結果である（『日本人の情報行動2015』（東大出版会、2016）。年齢別モバイルネット利用時間の推移（2005~15年）がグラフになって示されているが、40歳代以下が急速にモバイル利用が多くなっており、50~60代は微増である。テレビの視聴時間の推移も示されているが、60代ではほぼ変わらず微増傾向にあるが、50代以下の人はそれが減少し、若い人ほど減少が著しいという結果である。頭の中で考えていたことが数字となってグラフ化されると実に分かりやすい。

このような現代的な物理的変化は、比較的最近のスマートフォンの普及と関連するわけであるが、それを良しとするか、悪しとするかは利用側の責任であり、他人がとやかく言う筋合いのものではあるまい。しかし、子供のうちからスマートフォンを操ってゲームなどを楽しんでいる姿を多く見かけると、それについては何か違う気がするの自分だけではないと思う（ガラ系の携帯電話しか扱ったことがない私のひがみかもしれないが…）。ものの変化が宗教心にまで影響していると考えれば、宗教とは一体何なのかと考えさせられるのである。

（公財）北海道生涯学習協会
会長 宇田川 洋

事務局からのお知らせ

●会費納入のお願い

当協会では、今年度も会員の皆様のご支援ご協力により各事業を実施しております。

今年度の会費が未納の方は早めの納入についてよろしくお願ひいたします。

●表紙写真提供 三原和廣氏

協会職員の動き

4月1日付け異動

学習振興課長 長田和夫
学習振興課嘱託職員 北嶋和幸

4月1日付け採用

学習振興課主事 三鍋宏奈

3月31日付け退職

学習振興課主事 木元希

編集後記

この冬は、航空機の欠航やJRの運休が相次ぐなど悪天候が続きましたが、寒さも緩み草花の芽吹きが楽しい季節となりました。

当協会の平成28年度事業も滞りなく終了することができました。皆様のご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

今号には、平成29年度の事業計画を掲載させていただきました。

この事業計画に基づき職員一同、より充実した事業となるよう努めて参りますので、今年度も皆様のご支援をいただきますようお願い申し上げます。